# 韋君宜の著作における「歴史」の意味について

楠　原　俊　代

は　じ　め　に……459
Ⅰ　韋君宜の執筆スタイル……461
Ⅱ　ある製鉄工場の歴史とその注釈……472
Ⅲ　歴史を「反思」し、記述すること……484
お　わ　り　に……489

## は　じ　め　に

2006年9月、湖南人民出版社から出版された陳文新主編、於可訓･李遇春分冊主編の『中国文学編年史・当代巻』に、中国では著名な作家である[(1)]韋君宜の代表作『思痛録』が収録されていない。『思痛録』は北京十月文芸出版社から1998年5月に出版されたもので、インターネット上の「韋君宜在線紀念館」、「紀念文選」の頁[(2)]に、本書は「1998年十大好書」の第1位に選ばれた、と記されている。

「1998年十大好書」とは、同頁によれば、1998年12月中旬、選考委員50余人の郵送による投票で最終選考がおこなわれ、文学類と、非文学類、各10冊が選出された。「中国の公共知識分子が中国公衆に推薦する本年度の優れた公共読み物」を選出することを基本的な出発点とし、「一般性（非専門性）」と販売部数にとらわれることなく読み物として「高品位」であることが強調された[(3)]、という。

選考委員50余人の全氏名も掲載されていて、「1998年十大好書」は、作家の王安憶、余華、莫言、詩人の牛漢、卞之琳のほか、丁聡（漫画家）、李鋭（毛沢東研究専家）、龔育之（中共党史研究専家）、丁東（評論家）、王緝思（国際政治学者）、劉軍寧（政治学者）、許紀霖（歴史学者）、江暁原（天文学者）、陳晋（中央文献研究専家）、除友漁（哲学者）、藍

翎（評論家・作家）など、多様な分野の専門家によって選ばれたものなのである。選考委員の全氏名を掲載した後に、「これら中国の一流学者による判断には相当の代表性があるものと信じる」と記されている。

『思痛録』が、「1998年十大好書」文学類の第1位に選ばれたにもかかわらず、なぜ、前掲『中国文学編年史・当代巻』には収録されなかったのか。

しかも、『思痛録』は1998年5月に初版8千冊が出版されるやいなや、1週間も経たないうちに売り切れ、それ以後1.5万冊ずつ、2カ月余で4次印刷まで出た。さらに半年以内に、5次印刷まで出るというように、たいへんな売れ行き[(4)]で、『思痛録』出版以来2年余のうちに、各種新聞雑誌に発表された、韋君宜と『思痛録』を評価する文章は百編をくだらず、「韋君宜現象」ともいわれる文化現象が起きた[(5)]、というのである。

『思痛録』は、小説『露沙的路』と合わせて、韋君宜逝去1周年を記念して、2003年1月に最新修訂版『思痛録・露沙的路』が北京の文化芸術出版社から出版されている。同書の表紙には、「巴金の『真話集』[(6)]以来の真話〔本当の話〕[(7)]を語った回想録・初めて延安の搶救運動を描いた力作」と記載されている。表紙の折り返し部分にも、

> 『思痛録』は、出版後、極めて大きな反響を引き起こし、多くの知識分子を啓発して、歴史を反思〔反省･振り返って考えなおす〕する責任感と使命感を呼び覚ましたため、文化界から「韋君宜現象」と称された。

と記されている。

このような「公認の文化現象」まで引き起こした『思痛録』が、なぜ陳文新主編、於可訓・李遇春分冊主編『中国文学編年史・当代巻』（湖南人民出版社、2006年）には収録されていないのか。「1998年十大好書」、文学類第2位に選ばれた季羨林著『牛棚雑憶』は、同書1998年4月のところに収録され、中央党校出版社から出版されたことが記されている。にもかかわらず、韋君宜の代表作である『思痛録』が収録されていないのは、敢えて中国文学史の中で『思痛録』を無かったものにしようと意図されたことによるものなのか。『中国文学編年史・当代巻』には、本書編纂委員会成員の全氏名を掲載した後に、「国家社会科学基金項目・武漢大学人文社会科学重大攻関項目」と記されている。本書は、国家と武漢大学のプロジェクトとして編纂、出版されたものなのである。もっとも本書巻末の「人名索引」によれば、韋君宜は計13箇所に収録されている[(8)]。『露沙的路』が人民文学出版社から1994年6月に出版されたことは記されていないが、『露沙的路』の一部が、1994年4月20日『当代』第2期に掲載されたことは記されている。作家韋君宜の存在まで無かっ

たことにされたわけではない。

だが今後、韋君宜の『思痛録』は前掲『中国文学編年史・当代巻』に無かったように、中国文学の歴史の中で無かったものとされてしまうのだろうか。韋君宜が啓発したという「歴史を反思する責任感と使命感」とは、どのようなものであったのか。すなわち韋君宜は「歴史」とどう向き合い、その著作において何を語ろうとしたのか。本稿は、韋君宜の執筆スタイルと韋君宜の著作における「歴史」の意味を明らかにしようとするものである。

## Ⅰ　韋君宜の執筆スタイル

2001年3月、陳漱渝主編の『中国当代文化現象叢書』の1冊として、邢小群･孫珉編『回応韋君宜』が大衆文芸出版社から出版された。この『回応韋君宜』〔韋君宜に答える〕という変わった書名の本について、「韋君宜在線紀念館」の「活動年譜」には、「『思痛録』に対するそれまでの社会的反響を編集し、韋君宜の出版されたすべての作品集の前言と後記も収録」と記されている[(9)]。

韋君宜の生前に、単行本として出版された韋君宜の著作は、以下の13冊である。書名の左側の数字は、その「前言」あるいは「後記」が『回応韋君宜』に収録された際の順序である。

韋君宜著作リスト

①『前進的脚跡』（中国青年出版社、1955年10月）、散文13編（全部で91頁）

②『女人集』（四川人民出版社1980年2月）、小説17編（314頁）

『似水流年』（湖南人民出版社、1981年8月）、散文22編（208頁）

③『老幹部別伝』（人民文学出版社、1983年2月）、小説6編（264頁）

⑥『老編集手記』（四川人民出版社、1985年1月）、散文19編（95頁）

⑤『故国情』（天津・百花文芸出版社、1985年8月）、散文24編（269頁）

④『母与子』（上海文芸出版社、1985年12月）、長編小説（495頁）

⑦『旧夢難温』（人民文学出版社、1991年5月）、小説13編（287頁）

⑧『海上繁華夢』（人民文学出版社、1991年8月）、散文51編（272頁）

⑨『露沙的路』（人民文学出版社、1994年6月）、長編小説（193頁）

⑩『我対年軽人説』（人民文学出版社、1995年8月）、散文（217頁）

中国当代作家選集叢書『韋君宜』（人民文学出版社、1995年12月）

小説9編、散文24編（465頁）

⑪『思痛録』北京版（北京十月文芸出版社、1998年5月）、長編回想録（199頁）
香港版（香港天地出版公司、2000年）、（233頁）
最新修訂版『思痛録・露沙的路』（文化芸術出版社、2003年1月）、（394頁）

韋君宜の著作全13冊のうち、11冊の「前言」あるいは「後記」が『回応韋君宜』に収録されているが、刊行年順でもなければ、小説と散文ごとに並んでいるわけでもなく、編集基準は不明である。『韋君宜』は中国当代作家選集叢書の1冊で、各単行本から選んで編集されたアンソロジーであるため、『回応韋君宜』に収録しなくてもよいとして、その他の12冊のうち、なぜ『似水流年』1冊の「後記」だけが収録されなかったのか。『回応韋君宜』巻末付録の「韋君宜作品目録」には、『似水流年』も記載されている。

『回応韋君宜』は上編（韋君宜作品）と下編に分かれ、上編には、韋君宜の著作11冊の「前言」あるいは「後記」の他に、『思痛録』から4章と、韋君宜の20数編の散文〔回想文〕が収められている。本書「前言」によれば、『思痛録』の4章は、『思痛録』を読んでいない人がその基本精神を理解できるように選んだものであり、20数編の散文は、これまで単独で発表されたもので、『思痛録』ほど大きな反響は呼ばなかったが、文章の風格においても時代背景の上でも『思痛録』とはなはだ似通っていて、姉妹編とも見なせる。今、本書にまとめて収録することによって、読者は新たな感銘を受けることであろう、という。下編が、「韋君宜在線紀念館」の「活動年譜」に記された「『思痛録』に対するそれまでの社会的反響を編集」した部分で、出版以来2年余の間に、新聞雑誌に発表された韋君宜と『思痛録』に関する文章の一部など計42編と、黄秋耘・唐達成らに対するインタビュー記録が収録されている。

韋君宜の著作の「前言」「後記」について、『回応韋君宜』「前言」には、読者がより全面的に韋君宜を理解できるよう、本書にはさらに韋君宜がみずからの著作のために執筆した「前言」「後記」と彼女の小伝を収めた、とのみ記されている。韋君宜が著作の「前言」「後記」に記しているのは、何をその著作に収録したか、何を、どのように、何のために書いたか、つまりみずからの執筆スタイルである。

全著作13冊のうち12冊が1980年以降に出版されたものであり、60歳をとうにこえてからのことである。韋君宜は、1939年1月に延安に到着して以来、1985年12月末に人民文学出版社社長を退職するまで、『中国青年』（延安版）・（晋西版）、『抗戦報』、『文芸学習』、作家出版社、人民文学出版社などで編集工作にたずさわってきた[(10)]。韋君宜も中国当代作家選集叢書『韋君宜』の「自序」で、作家として人生の終止符を打つつもりはなかった、いつも人に、自分は生涯編集者だと言ってきた、と述べている。そのような人物が、60

歳を過ぎてから、しかも人民文学出版社社長としての職責を果たしながら、その勤務時間外に執筆したのであるから、たいへんな覚悟のもとで執筆していたはずである。

韋君宜自身が、なぜ書くのかについて、「我的文学道路」の中で次のように述べている[11]——かつて幹部学校で、将来もしも北京に帰ることができたなら転職する、文芸に携わらなければならないのなら、せいぜい編集者にしかならず、絶対に一字も書かない、と「改造」中の同志たちに宣言していた。北京に戻ってからもそれを実行。しかし、一家は離散し、子供の1人は精神病となり、さらには多くの友人や同志が非業の死を遂げたという情況の中で、こんなことをしていてはいけない、自分の見たこの10年の大災難を本に書こう、書かなければならないと密かに志を立てた。当時は提綱さえ隠語で書かなければならなかった。

韋君宜がこうして書き始めたのが『思痛録』なのだった。韋君宜の娘の楊団によれば、韋君宜が『思痛録』を書き始めたのは、四人組粉砕の前、周恩来逝去の前後という政治状況の極端に悪かった時期であり、このことは四人組粉砕後もさらにしばらくの間は楊団にも秘密にされていた。『思痛録』は1976年から1986年まで執筆、1988年には編集を終え、1989年初め出版社に送付するが、1998年まで出版できなかった。韋君宜は「書いたところで決して発表することはできない。この原稿が発表できるときが来たなら、国政は真に公明正大となっているのだ」と考えながら、本書を執筆していたという[12]。『思痛録』は韋君宜の全著作の中で最後に出版されたものであるが、執筆に着手したのは、文革以後の作品群の中では最も早かったのである。

書いたところで決して発表することができない、そのような作品を書き続けながら、あるいはそのような作品が完成している一方で、韋君宜は1980年以降、11冊もの著作を次々に発表していったのである。それにしてもアンソロジーを除く韋君宜の全著作12冊のうち、『似水流年』1冊の「後記」だけが『回応韋君宜』に収録されていないのは、なぜなのか。紙幅もわずか2頁しかないのに、いかにも不自然である。いったい何が書かれているのか、ここで見ておきたい。

『似水流年』「後記」（湖南人民出版社、1981年）、散文22編（208頁）

本書には、私が長年にわたって書いてきた散文の中から選んで収録した。その目的は、読者に私という作者——1人の老人、青年時代から革命を追い求め、革命に参加し、その後革命の道程の中で、デタラメなことも言ったし、誤りも犯した、自分も打撃を受けた、そういう人間を理解してもらうためである。このような人間は老人世代の中で1人だけにとどまらず、典型性さえ持っている。私は自分のこれまでの文章を1冊

の本にまとめて出版するという方法によって、暫時、自伝小説を書くかわり、あるいは暫時、歴史のかわりとする。これは当時の確かな証拠の「原材料」であり、粉飾する余地のない歴史である。「文化大革命」以前と以後に書いたものが、それぞれ半分を占める。最も早く書いた2編は、抗日戦争以前に発表したものである。〔略〕

中ほどの大部分は革命参加後、特に解放後の17年間に書いた散文である。この間に書いた散文はこれだけにとどまらない。この4編を選んだのは、真実の歴史を反映させるためである。大部分は本心から新中国を褒め称えたものである。そのうちの1編、1958年の「大躍進」を褒め称えた「一個煉鉄廠的歴史」〔ある製鉄工場の歴史〕は、言っていることがとりわけデタラメなのであるが、これも本書に収録し、同時に「対夢囈的注解」〔タワゴトへの注釈〕を付け加えた。私はこう思うのである。これらの歳月われわれの祖国は大きな回り道をし、少なからぬ誤りを犯した。私自身およびその他の作家（後に打撃を受けた者も含む）にこれらの事柄について決定権はなかったが、しかし、われわれの頭はずっと覚めていただろうか。少なくとも私はそうではなかった。その後の悲惨さは自分でも味わい、傷跡もある。だが、当初の回り道とタワゴトは自分にも責任がある。私はそれを正直にさらけ出したい。もちろんこれを収録するのはこのようなタワゴトを宣伝するためではないため、その「注釈」を付け加えた。

後半は「文化大革命」後に書いたもので、ほとんど全てが傷痕の記録である。そのうち追悼文が大半を占めるが、仕方のないことである。10年の大災難が私にもたらしたものであり、ありのままに記録せざるを得ない。「前向きに」ということについては、ほんの少ししか触れていない。私はこう考える。これらの悲惨極まりない教訓を生かさなければ、容易には得られない安定を大切にするということも理解できない。それを大切にしないで、どうして前に進めるだろう、と。私はもっぱら化粧で飾ったような散文を好まない、おそらく「載道」派に属しているのであろう。同じ「道」でもどのように「載せるか」の法則は各人各様の考え方がある。私は自分の思想に忠実にするしかない。ただそれだけのことである。

歳月は水の流れのように速く過ぎてゆく。このささやかな本は基本的にこのような「流水帳」〔日記帳・単に羅列されているだけの記述〕であり、ゆえに『似水流年』と名付けた。1981年3月〔下線は楠原、以下同〕

これが、アンソロジーを除く韋君宜の全著作12冊のうち、『回応韋君宜』に唯一収録されなかった『似水流年』の「後記」である。『似水流年』は、文革〔文化大革命〕終結後

に出版された第2の単行本であり、最初の散文集である。本書には1935年から1980年の間に書かれた散文22編が収められているが、「後記」には、それを暫時「自伝小説」のかわり、あるいは「歴史」のかわりとする、これは粉飾する余地のない「歴史」であると述べている。また中華人民共和国成立後文革にいたるまでの17年間に書いた「一個煉鉄廠的歴史」など4編を収録したのは、「真実の歴史」を反映させるためだとも記している。短い「後記」のなかで4回も「歴史」という言葉が使われている。韋君宜は「歴史」を「正直にさらけ出し」、「ありのままに記録」する。悲惨極まりない「歴史」の教訓を生かさなければ、容易には得られない安定を大切にするということも理解できない。韋君宜の書く「歴史」は、韋君宜1人だけのものではなく、典型性さえ持っている、という。

しかし韋君宜はその他の著作「前言」「後記」の中で、「歴史」という言葉をほとんど使っていない。『思痛録』を除けば、『故国情』『老編集手記』で各1度使っているだけなのである。それでは、韋君宜が『似水流年』以外の著作「前言」「後記」で、何を、どのように、何のために書いたか、すなわち、みずからの執筆スタイルについてどのように語っているか、抜粋要約して、『回応韋君宜』に収録された際の順序で見ていく。

①『前進的脚跡』「後記」（中国青年出版社、1955年10月）、散文13編（91頁）

本書には1949年の北京解放後1953年末まで、私が『中国青年』誌上に発表した青年の思想問題に関する論文と書評の一部を収録した（最後の一編のみ1955年に執筆）。これはわれわれの青年が前進する途上に残したいくつかの足跡といえるだろう。この5年はまさにわが国の青年が社会主義社会に通じる大道で勇躍前進した5年である。

これらの文章はおおむね急いで書いたもので、運動が起きるといつも編集部は青年読者から手紙を受け取り、必ず次の号で答えなければならなかった。

わが国においてはこのように天地のひっくり返るような大きな変化がまさに起きている。この変化しつつある現実世界が青年の思想感情におよぼす影響はあんなにも大きく、彼らはたえず国家の変革とみずからの生活を結びつけて考えることを余儀なくされている。そこで多くの問題が生じてくる。本の中に答えを見つけられないので、彼らはあせって方々に質問する。とりわけ大きな政治運動が起きるたびに、青年たちから質問が次から次へと大量に寄せられる、あんなにも大量に、あんなにも差し迫った質問が。みなが尋ねる、どのように考えなければならないのか、生活するのか、祖国にとって有用な人間となるのか、と。

〔青年の質問に答えるための文章を〕執筆の際には質問の幼稚さについてはあまり考慮せず、また自分の見解が皮相かどうかについてもあまりかまわなかった。しかも

青年読者がはっきり分からないのでは困ると思い、いつも1つ1つ意味を繰り返し説明して、できる限り分かりやすく述べ、含蓄のある表現はまったく使わなかった。文章に凝ることはまったくしなかった。1955年

本書は、文革前に出版された唯一の、全部で91頁の小さな本である。宗璞は、「新時期以前は、50年代前期を除く数十年の生活を総括すれば、批判と被批判、闘争と被闘争であり、階級闘争について毎年語り、毎月語り、毎日語った」と述べている[(13)]が、本書によれば、50年代前期でも、当時としては「天地のひっくり返るような大きな変化」が起き、「大きな政治運動」が何度も起きていたことが知られる。

②『女人集』「後記」(四川人民出版社1980年2月)、小説17編(314頁)

本書には、革命に参加しながら勤務時間外に書いた小説(老解放区で書いたもの3編、文革前に書いたもの12編、四人組粉砕後に新しく書いたもの2編)を収録。本書は本来文革前に出版されることになり、半分まで印刷できていた[(14)]ところ、「訪旧」「月夜清歌」の2編が批判され、廃棄処分となった。すでに雑誌などに掲載されていたこれらの短編は、文革中には「毒草材料」として本にまとめて出版され、いたるところに配布された。したがって今回で3度目の出版ということになる。

いま旧作を読み返せば、自分の作品ではなく、別の青年知識分子が党の教育の下で、いろいろと考えて、やっているような気がする。まず、誠心誠意思想改造を受け(「群衆」「三個朋友」)、それから力を込めて党を謳歌し、社会主義新人新事〔事物〕と革命の伝統を謳歌し(「阿姨的心事」「奨品」と長辛店の数編)、昔の苦労を思い起こして今の幸せに感謝する(「家訓」)。これが本書の主要部分である。芸術のうえで私は、私が確かに見たことしか書かなかったし、私が謳歌したものはすべて私が本当に素晴らしいと確かに感じたことだった。

〔文革期の〕暗黒面を生みだしたのは、四人組と若干の社会主義を盗んだ人である。にもかかわらず彼らは、人がこの暗黒面を指摘すると「社会主義の体面を汚した」と言う。この問題は今も徹底的には解決されていない。これこそが問題なのである。

四人組粉砕後に書いた2編では、このすでに年老いた、思想が単純な幹部の、これらの複雑な問題に対する思索を描いた。四人組統治期には自己批判以外に一字も書けなかった。しかし私は思索することをやめなかったし、今後もさらに思索と学習を続けていく。四つの現代化の実現のために、またまさに「前を見る」ために。1979年9月

③『老幹部別伝』「後記」（人民文学出版社、1983年2月）、小説6編（264頁）

本書には四人組粉砕後に書いた小説6編を収録。若くて元気なころにはずっと編集工作と行政事務で忙しく、そのうえ運動をやるのでも忙しく、最後の十数年は審査を受け、幹部学校へ行って使い果たした。私の一生はまことに執筆に従事する時間がなかった。第一線を退いてから、他の人々はみな回想録を書いているが、私はやっと小説を書き始めた。私は時間との競争で、私のよく知っている人と事について書かなければならない。私の書いたことは必ずしも正確ではないし、短い数編の小説では全体を概括することなどなおさらできない。しかし私は全力を尽くして、推測ではなく観察したことによって書いてみた。

小説はもちろん主に若い読者に読んでもらうためのものであり、老人の自己陶酔のためのものではない。私は常に思っている、まだ探索し続けなければならない、私を悩ませている問題の答えを探し続けなければならない、と。私が書くのは、若い人に教訓を授けたいだけというのでは決してなく、皆さんと一緒に探索してみたいからである。

④『母与子』（上海文芸出版社、1985年12月）は、韋君宜の夫〔楊述〕の母〔楊肖禹〕がモデル、34.7万字、495頁の長編小説。楊肖禹は搾取階級の家庭（資本家兼地主）出身の寡婦であったが、抗日戦争がはじまると家財を投げうって、一家全員で中国共産党の下に身を寄せた。1948年死亡、享年57歳、48歳で中共に入党した。

「後記」

実在の人物を思い出して、私はこの小説を書いた。

彼女の物語を知ってから、私はいつもそれを書きたいと思ってきた。この思いを抱いてから20余年が経った。10年の内乱の前にはもう書き始めていた（本書の最初の数頁である）が、最後には放置した。彼女の出身が良くないからである。当時このような人物を書けば必ず「地主階級を褒め称えている」という非難を受けた。その後、10年の内乱が終結したばかりのときにも書きたいと思った。このときもまた別の議論があった。社会はもう70、80年代になり、かつて神聖とされた全ての感情はすでに過去の時代のものとなった、いま掘り起こさなければならないのは、新型の人物であり、彼らの真に複雑な内心だという。そこでまた数年放置した。

1983年になって私は勇気を奮い起こして書き始めた――私も老いた、宿願を果たさなければならない。私が書いたのは英雄の伝記ではなく、小説である。できるだけ人物を理解しようと努力した上で書いたが、理解はまだ十分ではない。私が言

いたかったのは、人生の道は各種各様、人の考えや志、感情も各種各様だということ。作品を読まれるときには様々な人物をご理解いただきたい。あらゆる時代のすべての人物の思想感情が、現在の自分と一致するものではない。それは新たな単純化であろう。1984年3月

⑤『故国情』「後記」（天津・百花文芸出版社、1985年8月）、散文24編（269頁）

本書には、1981年から1984年に書いた散文に加えて、38年前の「八年行脚録」文語〔1945年8月15日延安中央党校で執筆〕を収録。

私は散文作家でもなければ、さほど散文を書いてきたわけでもない。何か主張があるわけでもない。ただ書かなければならないと思ったときに書いた。書きとめる価値があると思ったことも書いた。叙事の方が叙情や紀行よりも多い。正統の散文とは似て非なるものである。

本書には散文といえないものも収めている。たとえば「王翰伝」など、まったく文学とはいえないものであろう。それでは何といえばよいのか。歴史著作といえるのか。史学家は絶対に承認しないに違いない。

「八年行脚録」は今見れば「史料」ということができる。今私に書けといわれても決して書けないものである。1984年12月

⑥『老編集手記』「後記」（四川人民出版社、1985年1月）、散文19編（95頁）

このささやかな本には、近年書いた編集工作に関わる文章を収録。

10年の大災難のとき、私も4年間編集工作を行なった。この工作は私にとってはたいへんな苦痛であった。私は多くの質の高くない原稿を印刷所に送り、作者らには多くの誤った「アイデア」を出した。これは私の編集工作史上において忘れられない1頁である。

〔収録された文章のうち〕2編は大災難の後期に原稿を返却したときの原稿審査札記である。そのうちの1編は水掛け論の果てにようやく返却したもので（これは当時、このような作品が素晴らしいとあくまでも考える人がいたことの証明であり、そのように断定するとはなんと恐ろしいことか）、われわれ編集者がかつてどのような問題に遭遇して、どうしたかのあらましを知ることができる。若い編集者の皆さん、われわれはこの歴史の1頁をしっかりと記憶し、どうすればその再現を阻止できるのか考えてみよう。1983年夏

⑦『旧夢難温』「後記」（人民文学出版社、1991年5月）、小説13編（287頁）

これもまた小説集である。1986年以来、重病のため私は死にかけ、それ以来構想を練って小説を書くことができなくなった。本書は最後の一冊となるであろう。

私は読者の皆さんに、別れを告げなければならないと同時に、私のこれまでの一貫した執筆態度について簡単に説明しておきたい。態度は正直に自分が見て知っていることに基づいて書くというもので、嘘はつかず、ホラを吹かず、捏造もしない。小説は現実生活を書くものであり、私は現実生活こそ、われわれの真の先生であり、もったいぶる必要はないと思う。私は読書に際して中外古今の現実主義の大家を好み、彼らから学びたいと思っている。

この時代、文学作品はとりわけ流行らず、売れ行きは哀れなほどで、お金を出して創作物を買ってくれる人はみなわれわれの友人だと言わなければならない。道義上からいっても友人に申し訳ないことはできない。少なくとも友人には真話を語るべきである。書き方の精粗は別の問題で、まず本当のことを語るのである。

本書に収録したのはすべて病気になる前の作品（1982年以前の中短編小説は『女人集』『老幹部別伝』の2冊に収録）。〔略〕

私はいま手をなんとか動かせるだけであるが、呼吸できる間は少しずつ短いものを書き続けて読者に報いたい。1990年7月1日

⑧『海上繁華夢』「後記」（人民文学出版社、1991年8月）、散文51編（272頁）

本書には、最近書いた散文と50数年から40数年前の旧作3編を収録。

3編の旧作は、何十年も前の古い刊行物の中から見つけ出したものや、文革の家捜しで持って行かれた後返却された「材料」の中から見つけ出したものである。これは過去の私が書いたものであり、1人の青年が筆を振るって事実をありのままに、当時の彼女の勇往邁進しようとする願望を書いたものである。今日の作者が描く当時の青年のように、満腔の英雄的気概を持ったことはない。飾り立てることなく自分の貧しい日々と泥くささを書くことしか知らなかった。これらの真話を捨ててしまうのも惜しく、今日の文集に収めて、今日の読者に見ていただく次第である。1990年6月

⑨『露沙的路』「後記」（人民文学出版社、1994年6月）、長編小説（193頁）

本書は早くから書きたいと思い、またとっくに書くことのできたものである。それが延び延びになって、病気で倒れてからやっとのことで筆を執り、この思いをなんとか書き上げた。

執筆時にはもう脳溢血の発作後で半身不随になり、手足も不自由になっていた。頭の一部がまだ使えるからこそ、心にものを思う、生きている限りできるだけのことをしよう。誰が病気でこんなになってもまだ小説を書くだろう。だが、私は書かなければならない。1日に少しずつ書き、明日書こうと思う内容を今日しっかりと覚えておき、前に長編を2冊書いた程の力を使ってこの十万字ばかり〔13.5万字〕を書いた。

考えは本書に記した。いずれにせよ私の書いたものは、私が確かに経験した生活であり、私は決して誇張して書いたものを読者に見せたくはない。1993年7月

⑩『我対年軽人説』「後記」（人民文学出版社、1995年8月）、散文（217頁）

本書には、この2、3年に書いた散文を収録。若い人に教訓を垂れたいためでも、老人の自己陶酔のためでもなく、若い人と話をして、若い人が知らないあるいはあまりよく知らないであろう事柄について話したいから、書名を『我対年軽人説』にした。

私と私の同時代人、「一二・九」の青年たちはみなその生涯に終止符を打たなければならないときを迎えた。最初、われわれは満腔の熱血を抱きほとんど列を成して革命の隊伍になだれ込んだ。報道や訃報によれば、この世代は功業を打ち立てたようである。しかしよく考えてみればわれわれの一生は本当に各人各様なのである。

私は年老いた。頭はまだ呆けてはいないが、2度の脳溢血と2度の脳血栓で廃人にまで成り果て、もはや心の思うままに自分の思いを書くことはできなくなった。病床に横たわっていると、私の同時代人の面影が常に目の前に浮かんで、私は彼らの偉大ともいえないが、凡庸でもなかった一生を並べて若い人たちに見てもらわなければならないと思うに至った。このことについて私はこれまでにも少なからず書いてきたが、まだまだ書きたいことはあまりにも多い。今はそれも書けなくなってしまい、〔本書に収めた〕わずかばかりのものしか書けなかった。

若い人たちが人生を締めくくるときに、われわれよりも幸せでありますように。

1994年3月19日

⑪『思痛録』北京版（北京十月文芸出版社、1998年5月）、長編回想録（199頁）
香港版（香港天地出版公司、2000年）、（233頁）
最新修訂版『思痛録・露沙的路』（文化芸術出版社、2003年1月）、（394頁）

『思痛録』については別稿で述べている[15]ので、本稿においては特筆すべき点についてのみ記す。韋君宜の著作の中で『回応韋君宜』に収録された「前言」は『思痛録』だけ

で、北京版「縁起」〔4頁〕、香港版「縁起」「開頭」〔7頁〕の部分が「前言」に相当する。『回応韋君宜』には、北京版「縁起」がそのまま収録されているが、目次と本文のタイトルは、「『思痛録』縁起和開頭」となっている。実は、香港版「縁起」「開頭」が韋君宜の作で、北京十月文芸出版社から『思痛録』を出版する際に、この2編があまりにも「尖鋭」なため、香港版「縁起」「開頭」を一つにまとめて北京版の「縁起」ができたという[(16)]。

以下、『回応韋君宜』に収録された『思痛録』北京版「縁起」について述べていく。

『似水流年』以降、韋君宜は著作「前言」「後記」の中で、「歴史」という言葉をほとんど使っていないが、『思痛録』では4回使っている。しかしその用法は『似水流年』とずいぶん異なっている。最初の段落で2回用いているが、四人組失脚後、多くの人が「自分の冤罪についての歴史を書いた」、「厳粛な態度で客観的に〔自分の冤罪についての〕歴史を書く者」というような表現で、この場合「歴史」は「個人の経歴」か「自分史」の意味合いで使われている。残りの2回は、最後の段落で次のように使われている。北京版「縁起」は、香港版「縁起」「開頭」を大幅に削除して作成されたものであるが、【　】内は、北京版にしか記されていない部分である。

> 【歴史は忘却されてはならないものである。】この10年余り、私はずっと苦しみながら【回想し、反思し、】思索した。われわれの世代が成したことのすべて、犠牲にしたもの、得たもの、失ったもののすべてについて。思索そのものは1歩1歩進めてきたものであり、1日で書き上げたものではない。内容の深さが異なっていることについては、自分でも分かっているが、今は元のままに従った。より多くの理性的な分析は後世の人にまかせたい。私自身、今はまだ完全には言い尽くせないし、私の思惟方法もこれらの問題について討論する理論的根拠と条理性に欠けている。私はただ事実を述べ、事柄を1つ1つ並べるだけにする。【目的はただひとつ、すなわちわれわれの党が歴史的教訓を永遠にしっかりと記憶し、かつてのまわり道を2度と再び歩まないようにするためである。われわれの国家を永遠に正しい軌道の上で繁栄発展させよう。】

つまり『思痛録』では、自分の書いた文章についても、『似水流年』のように粉飾する余地のない「歴史」と言うのではなく、ただ事実を述べ、事柄を1つ1つ並べるだけにする、自分の思惟方法は、理論的根拠と条理性に欠けているから、と述べているのである。

1箇所でのみ「歴史」が使われていた『老編集手記』でも、韋君宜の言わんとすることは、この「歴史」の1頁をしっかりと記憶し、もし文革期にあったようなことが繰り返された

とき、どうすればそれを阻止できるか考えなければならないということで、『似水流年』と同じであるが、『老編集手記』で使われている「歴史」は、文革中の編集者がなめた苦難だけを指し、「歴史」の時間も範囲も『似水流年』にくらべ、ずっと限られたものである。『故国情』では、「王翰伝」は「歴史著作」といえない、史学家が絶対に承認しない、という使われ方なのである。

文革終結後、最初に出版された『女人集』には文革後の作品が全17編中2編しか収録されず、基本的に文革以前の作品集だといえる。『似水流年』は文革後に書かれた作品が半分を占め、実質的に、文革終結後に出版された最初の作品集なのだった。だからこそ、自分の書いた文章が当時の確かな証拠の「原材料」であり、「粉飾する余地のない歴史」である、との気負いも率直に出てしまったのであろう。アンソロジーを除く韋君宜の全著作12冊のうち、『似水流年』1冊の「後記」だけが『回応韋君宜』に収録されなかったのは、この「歴史」の使い方に問題があったのではないか。

しかし、いずれにせよ韋君宜の執筆スタイルは、特に文革以後に執筆された作品については、一貫して同じだったといえる。韋君宜はその著作の「前言」「後記」で、本章において見てきたとおり、何を、どのように、何のために書いたかについて繰り返し語っている。小説、散文を問わず、自分が書きたいこと、書かなければならないと思ったことを、正直に、自分が見て知っていることに基づいて書く、嘘はつかず、ホラを吹かず、捏造もしない、真話を語る。何十年も前の旧作を収録するのも、それが真話だからである。革命に参加するなかで、「われわれの世代が成したことのすべて、犠牲にしたもの、得たもの、失ったもののすべて」について思索・探索し、同じ誤りを繰り返さないために書くのである。若い人が知らないこと、あまりよく知らないであろう事柄について、若い人たちに話し、一緒に思索・探索を続けるために、『前進的脚跡』を出版したときから一貫して、文章に凝ることはなく、分かりやすく、含蓄のある表現は使わない、これが韋君宜の執筆スタイルである。

## Ⅱ　ある製鉄工場の歴史とその注釈

韋君宜は『思痛録』香港版「開頭」で、

> ここには自由と民主がないばかりでなく、われわれに自由と民主を排斥することさえ要求した。このとき私はキリスト教徒のように、もう自分の一生を捧げてしまったのだから取り返すことはできない、と考えるしかなかった。私は耐えて、耐えて、涙を

> 流して耐えなければならなかった。そうして私は自分を慰めた。対外的には、私はさらに1人の党員として言うべきこと、われわれの党があらゆる困難をどのように嘗め尽くして祖国のために戦ったかを話さなければならなかった。党の規律は鉄であり、戦闘のために全党は〔党〕中央に服従しなければならず、党の栄光しか語れず、党の欠点さえ多くは述べることができなかった。

と記している[17]。「党の栄光」しか語れなかったとはいえ、しかし韋君宜は嘘を書いたのではなかった。『女人集』「後記」でも、文革前に書いた小説について、韋君宜は、自分が確かに見たことしか書かなかったし、謳歌したものはすべて本当に素晴らしいと確かに感じたことだ、と記している。

その韋君宜が、「指揮棒の方向に従って物語を捏造」するのではなく、心から書きたいと思って書いた[18]のが、1958年の「大躍進」を褒め称えた「一個煉鉄廠的歴史」である。『似水流年』「後記」で、韋君宜は特に「一個煉鉄廠的歴史」を取り上げ、「言っていることがとりわけデタラメ」だと記していた。韋君宜は「真実の歴史」を反映させるために、「一個煉鉄廠的歴史」(1958年)と「対夢囈的注解」(1980年)を本書に収録した〔以下、「一個煉鉄廠的歴史」を「工場史」、「対夢囈的注解」を「注釈」と略記、引用の際には『似水流年』所収頁の数字のみ記す〕。傷痕を記録するだけでなく、「当初の回り道とタワゴトは自分にも責任がある」と考えた韋君宜にとって、この「工場史」こそ、当時の確かな証拠の「原材料」であり、粉飾する余地のない「歴史」の1つなのであった。

韋君宜は「注釈」の中で、「工場史」を収録するのは、後の人々に、1958年にはかつてこのように麗しくデタラメな夢があったということと、われわれの素晴らしい国家と大変好い人々がどうして、タワゴトの中でむざむざと歳月を葬り去ってしまったのかということを、知らせるためである。22年前の旧作「工場史」を読み直して感慨深い。少しの疑いもなくこれは全くのタワゴトであり、デタラメである。今日見てみれば、こんなことで工業化するのは、まったく不可能だということが、誰の目にも明らかであろう、と記している。〔82〕

それでは、誰の目にも明らかな失敗をどうしてしてしまったのか、タワゴトだ、デタラメだと言われても、それではどうしてそのようなタワゴトを書いてしまったのか。韋君宜のいう「真実の歴史」とは、いかなるものであったのか。それは、確かな証拠の「原材料」である「工場史」を読んでみなければ理解できない。

韋君宜は、1957年の反右派闘争で「党内厳重警告」の処分を受け、作家協会党組成員の職務を解かれ、中共中央直属機関の党代表の身分も取り消され、翌1958年1月、『人民

文学』副編集に就任、その肩書きのまま、河北省懐来県花園郷西楡林村〔後に、花園公社楡林大隊〕へ下放された。韋君宜は下放大隊長で、1つの郷に1個の下放幹部小組が置かれた[19]。この年に大躍進運動が始まり、食糧、鉄鋼の大増産が行われ、農村に人民公社、公共食堂が生まれた。「工場史」は、この年の末に執筆されたものである。

韋君宜は、「工場史」の中で、ある製鉄工場の歴史を、以下のように書き始めている。

> われわれのこの製鉄工場の歴史を書くのは、この工場に何か突出した創造、驚異的な記録、特筆すべき点があるからではない。われわれの工場はある公社の製鉄工場にすぎず、全国はいうまでもなく、全県においても第1位を勝ち取ったわけではない。つまり全国の何千何万という「小土群」〔小型・土法［在来の方法］・大衆路線〕方式の製鉄工場の中のありふれた1つでしかない。私が述べようとするのはこの何千何万とある普通の工場である。みなさんにこれらの普通の人々がこの数カ月間にしたことをちょっとご覧いただきたいのである。〔60、要約〕

韋君宜は、この歴史の全ての時間は（今日までの）2カ月半である。しかし、もう少し前までさかのぼってもよい。それは10カ月前のことである。当時この製鉄工場がなかっただけでなく、この村さえまだなかった。県の地図にはこのような場所がまだ存在しなかった、という。この「10カ月前」というのは、1958年の初めに、韋君宜が下放されて懐来県西楡林村にやってきた時を指す。汽車を降りてから村への道中、韋君宜は歩きながら目印を見つけ出そうとした。しかし、道の両側は禿げ上がったように何も無い黄砂が果てしなく広がり、多くの石が転がっているだけだった。春耕の前で農作物も無く、曲がる所に1本の木さえ無かった。仕方なく石が積み上げられて5つの山になっているのを目印に、「ここで曲がると花園駅」と必死になって覚えた。

10カ月前はそんなところだったが、この年の夏、この5つの石の山があった所にもう400戸余りの新しい村が建設された。南向きに建てられ、ガラス窓に瓦葺の家。地下水の水位が上昇した付近の村の人々が引越ししてきた。あの石は乱雑に積んであったのではなく、家を建てるための基礎の石で、政府が投資し、人民が働き、大通りの左側に新村があっという間に出現したのである。〔61〕

鉄鋼大増産運動が始まったのは、この年の9月のことであり、それから2カ月半にわたる製鉄工場の歴史を、韋君宜は以下のように詳細に記している。

2カ月半前製鉄工場を始めたとき、その唯一の基地は氷室の中の1部屋だった。氷室も建てられたばかりで、大きな空っぽの庭と2間の氷室と3部屋の泥煉瓦の建物だった。製

鉄所はそのうちの1部屋を占用していた。

その夜、韋君宜は製鉄工場責任者である公社党委の呉副書記を訪ねてここへ来た。眠るところを探すのはなかなか難しく、やっと隣の氷室を管理する老人の小部屋を空けてもらって、そこで眠ることになった。そこは部屋中が果物籠で、韋君宜は果物籠の上で眠った。空がほのかに白むころに起きて、外へ出てみると、工事現場は霧が立ち込め、かすかな光も物音もなく、農村よりもはるかに静かだった。

夜が明けてから工事現場に行く。炉の建設は始まったばかりで、1.5 $m^3$の陽城式の炉を規格に従って2つと、他にその8分の1の縮小型を3つ建てていた。まだ完成しておらず、高いものは人の高さ、低いものは1尺ほどしかなかった。炉建設責任者の副郷長は県で10日間学習し、十数人の左官を率いて建設していた。彼らは誰も製鉄炉がどんなものか見たことがなかった。〔62〕

韋君宜は責任者の副郷長と半分まで出来た炉によじのぼり、炉の内部と周囲を眺めた。炉のすぐ左側は一面の落花生畑、右側は新たに開かれた麦畑だが、植え付けはまだだった。落花生はよく実り、もうすぐ収穫の準備をしなければならなかった。炉の上に立つと、よく熟した農作物の香りを帯びた秋風が頬を軽くなでた。コテで炉に泥を塗っている左官は「われわれの隊の落花生は、ここのよりももっと良く出来ている」と言った。彼は自分の家の作物を気にかけているのである。遠くを眺めると、四方は深い緑の間に浅緑や黄緑の作物の海だった。見ればこの小さな製鉄工場は本当に小さく、炉も5つしかない。炉の周囲には多くの青草が茂り、炉を建設する労働者がシャベルで草の根を取り除いて、地突きをしていた。思わず、心の中に多くの幻想が生まれた。そのとき韋君宜はこう思ったという――この草地が最初の製鉄工場なのだ。麗しい将来において、ここはどんな風になっているだろう。韋君宜はそのはるかな「将来」に思いをよせたのだった。

この工場へ韋君宜が2度目に行ったのは、それからおよそ1週間後のこと。このときは前とはまるで様変わりしていた。まず人が数十倍にも増え、氷室を管理する老人の部屋はもう正式に鋼鉄指揮部のものとなり、公社第一書記の老耿が指揮部に出向いて指揮をとっていた。他に公社、大隊、県、専区からもみな幹部が来ていて、壁には赤い紙に書かれた、鋼鉄指揮部の作業分担名簿（建設担当、宣伝担当、後勤担当……）が貼り出され、体裁も整ってきていた。しかしこれも出来てから一日半しか経っていなかった。韋君宜が今回工場を離れていたのは、北京〔の鋼鉄学院〕まで鉄鉱石・石灰石・石炭のサンプルを届けて化学実験をするためだった。この工場の陽城式の大きな炉（1.5 $m^3$）はまだ完成せず、縮小式の炉が1つだけ完成していたので、これを試験炉とするしかなかった。〔63〕

この炉は家庭用の暖房ストーブほどの大きさで、せいぜい0.1 $m^3$ほどしかなかった。前

日にはまず軽便蒸気エンジンを運んで来るために、10里も離れた西楡林大隊まで人を遣った。その日、郷長、党委書記、県の幹部、省委が派遣してきた検査団が、一斉に炉の前に揃った。みなは服を落花生畑に脱ぎ捨てて仕事をはじめた（炉のすぐ傍までまだ落花生が生い茂っていた）。高郷長と王書記はエンジンを動かし、公安主任は大槌を振り回し、呉書記は鉄鉱石を量るのを手伝った。耿書記も来てしばらく作業をすると、また会議に出て炉型を見るために真夜中の貨車に乗って県へ行った。原料配合表をくれたのは北京から探してきた製鉄専攻の青年同志小劉。韋君宜はその夜、原料を準備し、計量する係だった。原料表では毎回石灰石を2.2 kg 入れると規定されていた。夜は照明も無かったが、韋君宜は少しの誤差もあってはならないと、手に懐中電灯を持って秤の目盛りを細心の注意を払って見た。また現場には土があり、原料の中に鉱石粉や土が混じりこんで凍結してしまうかもしれないので、シャベルではなく手で掴んだ、という。〔64〕

この日、早朝から蒸気エンジンをかけ、午後4時に炉に点火した。点火すると、全員が炉の前に集まり、鉄の出口を見つめた。やっとのことでねばねばとしたものが出てきたが、小劉はカスだと言った。食事の時間になっても、誰も行こうとはしなかった。後で班を作って順番に食事をすることにした。1回また1回と毎回鉄が出てくることを願ったが、出てきたのはいつまでも赤くてねばねばしたカスだった。夜の12時に県からまた技術員が1人来た。誰もがたえず空気口を見て、カスを見、空気口の中に食塩を播いた。知っている方法はすべて使ったが、効果はなかった。炉の底はますます高くなり、凍結がはじまった。それでもたえず原料を追加し、鉄の出口を開いた。その夜は不思議なことに誰も眠くなかった。夜の2時を過ぎると小雨が降りだしたが、誰も炉から離れなかった。みるみる凍結が進み、口をふさいでしまったが、みなは雨のなか炉を囲んで座っていた。実際のところ、みなこれではダメだと分かっていて、気を滅入らせていたが、誰も炉を止めようと言い出せなかった。毎回それでもまだ希望を持って出口を開いた。真夜中の3時半に炉は完全に凍結してしまい、鉄の出口が開けられなくなって、ようやくみな引き上げた。戻ってもいくらも眠らず、少し横になっただけで起きて、炉の前で総括会議を開いた。〔65〕

試験炉での製鉄は失敗した。しかし上級から公社へ、ただちに各村で炉を建設し、各戸で製鉄をし、3日以内に点火しなければならないという任務がもう届いていた。陽城式の炉はまだ完成しておらず、間に合わない。そこで8分の1縮小型の「小陽城式」2つに点火する準備をした。1つには蒸気モーターを使い、もう1つには木製の手動の風車2台を使うしかなかった。他に動力はなく、これでどうして任務を完成できるだろうと、公社の書記らは焦って検討したが、できるかぎりのことをして、あらゆる方法を使って、大衆を動員するという方法しかなかった。〔66〕

韋君宜によれば、このとき本当に多くの炉――下焦寺式、方形炉坩堝式、大坑式、水瓶式などを作って試した、この間の数夜、おそらく全公社の人々はろくに眠りもしなかったであろう、という。そして、そのそれぞれの方式について、どこから学んだもので、誰が試したかについて詳しく記している。ここで韋君宜の描写を見てみよう。

> 2、3里の長さの1本の大通りの両側にびっしりと人が座り、あちこちから鉱石を打ち砕く音がまるで疾風驟雨のように鳴り響いた。各式各様の炉から出る火の光は田畑に広がり、何万もの星の光のようだった。〔略〕
>
> 坩堝式は耿書記が作った試験炉で、耐火粘土をこねて坩堝を作った。袖を捲り上げ1日かけて坩堝を作って、点火したが、鉄はできなかった。厚すぎたといって壊すと、また薄いのを作った。道端の大坑式は各耕作区から来た社員が作った。照明もろくに無く、どれだけの人が働いているのか、はっきり見えなかったので、人々の間をかき分けて入っていったが、声が聞こえるだけで、前後左右すべてが人だということしかわからず、あちこちで声を掛け合っていた。道端には布団があるのがかすかに見えた。野宿するのだろう。しかしその夜は誰も布団で寝る時間が無かった。その夜は数千人が来ていた。しかし公社全体で同時に製鉄に取りかかっている者はこの数千人にとどまらない。各耕作区でこの一昼夜に200個ほどの炉を建設したのである。他に鉱山へ行って鉱石を運んで来る者、石炭を運びに行った者は含まれていない。
>
> あらゆる方法を試したが、できてきたものは硬い塊ばかりで、石炭よりも重くて硬いが、鉄よりも脆くて軽かった。これは何だろう。〔67〕

韋君宜は、このように、いつ、どこで、誰が、何を、どのようにしたか、それは何故なのかの事実を積み重ねて、鉄鋼大増産運動の2カ月半にわたる歴史を活き活きと記述してゆく。

このときにできたのは「団鉄」、2、3級品で酸化鉄だということだった。〔68〕小劉は大坑式、水瓶式、団鉄などこれまでに習ったことも、見たことも無い、これは回り道だ、と韋君宜に言った。韋君宜も公社の指導幹部も、実際にはこの製鉄の難関を突破していないことを知っていた。耿書記、呉書記は何日も眠れぬ夜を過した。指揮部内部でも弱音を吐く者がいたが、抗日戦争期の民兵隊長だった耿書記は厳粛な顔つきになって「たとえば敵がいまトーチカを占領していたら、死んでもトーチカを奪取しなければならない。それが党の任務、部隊の規律だ」と言った。〔69〕韋君宜は次のように記している――最初の戦役で出たのはすべて団鉄だったが、失敗とはいえない。何を製鉄炉というのか見たこと

もない人々が、いまでは鉱石を炉に入れ溶かして液体にできたのだから、珍しいことであり、どうして失敗といえるのか。

その次の第2戦役では、団鉄を出さないことが求められた。指揮部では、みなに大きなフイゴを作らせた。お婆さんたちの花嫁道具と思しき古いマホガニーの箪笥を使ってフイゴにした耕作区もあった。同時に人を四方に派遣して、動力を使わずに鉄を作る小さな炉型を学ばせた。多くの雑誌・新聞・小冊子から炉の作り方の記事も探した。

このとき韋君宜は、西楡林区の分工場に来ていた。ここで試したのは、炉の上半分が石油缶で、下半分が大鍋で出来た平炉で、韋君宜ら3人が張家口〔の冶金局〕へ行って見てきた方法である。〔70〕公社では屑鉄を集めて炉に入れ、まずそれを使って団鉄を溶かすことを試みた。韋君宜も参加したが、分工場には技術者も訓練を受けた労働者もおらず、誰も製鉄をやったことがなかった。みなはじめてドリルや大槌を持って正式に製鉄所の労働者になった。〔71〕数々の試行錯誤の末、ついに鉄水〔鉄のとけたもの〕が出た。次いで、鉱石を熔かして鉄を作ることにも成功した。中学校の河南万能式の炉からも、改良型「小陽城式」からも鉄が出た。これらはみな屑鉄をタネにして作ったもので、数十斤作ると底が盛り上がってしまった。〔72〕

そこで指揮部は各分工場、各耕作区の人々をすべて本工場に集中させ、全力を挙げて炉を建設することを決定。同時に、各耕作区に行っていた左官・大工・鉄工が戻って来て、炉の傍に建物を建てはじめた。〔73〕

韋君宜が鋼鉄指揮部に戻ってから工場に行くと、炉は点火されておらず、工事現場のようになっていた。今回はしかし前回とまったく違い、陽城式の炉はすでに7、8個出来ていて、2つ1組で長く並んでいた。落花生はもう収穫され、あぜ道も平らにされ、工場の敷地は4倍もの広さになっていた。元の落花生畑の上に万能炉と平炉を建設するのである。土や煉瓦を運ぶ荷馬車が10台ほど停まり、さらに荷馬車は数珠繋ぎになって道を走って来る。若者や薄緑色のスカーフをした娘さんだけではなく、纏足をしたおばさんまで煉瓦を運んでいる。太陽の下で数えられないほどの人がコテを持ち、足場を作り、敷地の基礎を掘り、地突きをしていた。この光景は北京西郊外の大建築工事現場と大差なかった。それだけではなく、もっとも重要なのはもう電柱を立て、電線が引かれたことである。〔74〕

残念なことに韋君宜は、ちょうどこのとき上級から、別の会議に出るよう通知があり、1週間留守にした。帰ってみると、韋君宜はこの工場だとは分からないほど変化していたという――1列に並んだ陽城式はみな完成し、全部で12。5つに点火、モーターで動かし、正常に鉄が出ていた。工場には電灯も取り付けられていた。陽城式と並んで周口店式〔3㎥〕も12並び、半分が完成し、残りの半分は工事中。端には6個の万能炉と24個の平炉〔0.4㎥〕

が整然と並んでいる。炉から少し離れたところは資材置き場で、100人余の鉱石を粉砕する労働者が集中して作業をしている。炉を取り囲んで建っているのは工場の本部事務所で、つい数日前に基礎工事をしていたところである。〔75〕後勤股、倉庫、医務室、放送室の建物が1列に並び、指揮部の弁公室と基本建設股、動力電気股の建物がまた1列に並んでいた。前にあるのは2列に並んだ地下厨房で、大食堂は建設中。後ろのバラックは大工・鉄工組……

炉で鉄を生産するのは、もう問題なくできるようになっていた。韋君宜は炉の前で働く製鉄工の作業服を見て、3カ月前、全県で人民公社成立を祝賀する大行進のあった夜のことを思い出した。韋君宜は県委員会の同志と一緒に県委員会の入り口のところで立って見ていた。20人ほどの白い作業服に柳の枝を編んだ帽子をかぶった人々の一隊がやって来た。これは県でできたばかりの製鉄工場の労働者隊だった。韋君宜は、「われわれの県で最初の現代産業労働者だ。このときわれわれは抑えられないほど感激した。いうまでもなく『われわれの工業化がはじまった』という共通の思いだった。みな懸命に拍手し、爆竹を鳴らした。白い作業服を着た一隊の人はほとんど全て英雄のようだった」という。その「工業化」が、韋君宜の下放先の公社でもはじまったのである。〔76〕

工場の上空では、祖国行進曲の音が高らかに鳴りわたっていた。これは工場の放送で、業務連絡の放送も流れた。放送機材は買ったばかりで、設置してから3日しか経っていなかった。放送室の隣は医務室で、これらの2列の建物は、建ててから数日しか経っていない。指揮部は2日前にあの氷室から移ってきたばかりだった。〔77〕

韋君宜は平炉で数日工作した。みなの意気込みは申し分なく、労働者は4里以上はなれた村に住み、昼夜の2班に分かれていた。幹部はまったく村へ寝にも帰らなかった。長城の外の11月、みなは炉の傍に高粱の茎で掘っ立て小屋を作り、疲れるとそこでしばらく横になった。小さな小屋の中でぎゅうぎゅう詰めになって、掛け布団にくるまり地面に座って会議を開いている情景は、かつて遊撃戦をやっていたときのようだった。鉄は1日に1トン余まで産出するようになっていた。しかし数日後、工場では平炉の操業を終了し、精鋭人員は全て陽城式と周口店式に移すことを決定した。任務はより大きく、条件もより良くなったからである。みなは技術も習得し、「小洋〔外来の方法〕群」に向かって前進できるようになった。もうこんなに多くの人員を消耗してフイゴを動かす必要は無い。余った人員は耕作区に戻り農業に従事する。〔78〕

韋君宜は述べている――いま陽城式と周口店式は全部で10個の炉に点火されている。1日の最高生産量は15トンにまで達した。工場入り口には鉄の棒を積み上げた2つの小山があり、鉄の棒には鉄道貨物の荷札がくくり付けられている。われわれの生産した鉄はもう

サンプルではなく、唐山製鋼所に送られる、国家の重要物資となったのである。

ある夜、韋君宜は製鉄工場を出て工場の中を眺めると、10個の炉の上から大きな炎が上がり、金色の大きな紅い花のようだった。工場構内の各建物、資材置き場と炉をつなぐ大きな道には電灯が明々と灯っていた。この地方の人々にとって、有史以来はじめて電灯が灯ったのである。電灯も製鉄と共にやって来た。電灯の光と炉の炎が見渡す限り明々と光り、道からでも炉の上部で働いている労働者の姿が見える。しかし、ここはもう2カ月半前のように、そこらじゅうで人の声がしているのではない。平炉の操業は終了し、もうあんなに多くの人がフイゴを動かすこともない。

それから韋君宜は工場の門前の大通りを歩いた。これは10カ月前、石を目印にして覚えたあの道なのである。〔79〕道はとても静かで明るかった。これは公社の「工業大街」、正面が汽車の駅で左側が製鉄工場、製鉄工場の小道から出てくると、中心商店。これは大きなガラス窓と耐火煉瓦、セメント瓦でできた新しい建物で、商品は北京の普通の中型の雑貨店よりいくらか多く、日用雑貨と食品以外に自転車、ミシン、折尺などもある。大通りの右側には、順に電力揚水ステーション、食堂、氷室、それから数日前にできた郵便局の緑色の建物。この後ろが新村である。道路沿いの建物は新村の小学校。この他に、製鉄工場の近くに製紙工場を建てる計画もある。

韋君宜は工業大街を歩いていると、突然2カ月半前にここの炉の上に立って将来を夢見たことを思い出したという。この「将来」は飛行機に乗ってまたたく間に雲の層を通り抜け、目の前まで飛んできたようだ。人は、幻想は翼を持つというけれど、翼を生やした幻想もこの現実には追いつけなかった。韋君宜は歩きながら工業大街の両側の高炉と建築群をながめていると、またこのような幻想を抱いたという――もう何カ月か経てば、ここにはさらにどのような工場や建物が生まれるのだろう、それはどのような光景だろう。

そして韋君宜は、最後にこの「工場史」を「これは普通の工場であり、たいへん短い歴史である。普通2カ月半は『歴史』とはいえず、ニュースでしかないだろう。しかしよく考えてみれば、これもまた確かに歴史なのである（団鉄を生産する時代はとうに歴史上の事跡となったではないか)。そこで私は、この『ある製鉄工場の歴史』を書いた」と述べて締めくくっている。〔80〕

ところが、この後に「付記」が加えられている。韋君宜が「工場史」を書き終えて1カ月余り後、県へ行って、歴史の新たな頁がまた開かれたことを知ったという。

県ではもう陽城式と周口店式の炉の操業をやめることを決定し、各公社の優秀な労働者は県の製鉄工場に集中させ、より大規模に、13 $m^3$の標準式の洋〔外来式〕高炉を建設することになった。「小洋群」、さらには「大洋群」へと前進する条件が整ったのである。「将

来」というならこれこそ本当に素晴らしい将来だ。あと数カ月すれば、韋君宜のいた耕作区の宣伝隊長だった小傅や、彼と同じ班の製鉄工も20年来離れたことの無い生まれ故郷を出て、冶金労働者となるのである。韋君宜は、「そこでわれわれのこの製鉄工場の短い歴史の終わりを喜ばなければならない。間もなくこの製鉄工場全体が『古跡』と『遺跡』となり、製鉄工場の『遺跡』の上には、乾燥フルーツを作る工場や、工作機械製造工場が出現するだろう。いずれ人民公社の工場史を編纂するときに、われわれのこの製鉄工場のことを忘れないでほしい」と述べている。〔81〕

以上の「工場史」について、韋君宜は、「注釈」で次のように記している。

> 工業化だ！電化だ！建設だ！これらのスローガンは祖国の富強を夢見る人々に実際あまりにも大きな吸引力を持った。私は1957年のわだかまりを捨て、国家建設のためにはどうしても自分の全ての力を捧げなければならない、それでこそはじめて大局を顧みるということだと考えた。
>
> 下放先の県はもともと素晴らしい県で、全国的に有名な海棠と葡萄の産地だった。何人かの年取った農民らは、「海棠の樹は息子よりも親孝行だ。息子は私を養えるとは限らないが、1本の海棠の樹なら、養ってくれる」と言った。また私の暮らした村には、すばらしい養豚所があり、子豚を売って儲けを出していた。このように豊かな県ではあったが、県の指導幹部は質素で、県委員会の建物は3棟の平屋しかなかった。
>
> しかし、鉄鋼大増産鉄運動がはじまると、皆が夢幻境に入った。なぜなのか？われわれ全員が非常に誠実で敬虔だったからである。毛主席が言った、1070万トン作らなければならない、鋼鉄があれば、英国を追い越し、米国に追いつける、鋼鉄は土法からはじめ、「小土群」をやる、というのを聞くやいなや、この「1070」という数字がわれわれの全生活の目標となり、現代化の大門を開く鍵となった。何千何万という農民が農作物を捨てて、製鉄をしにやって来たとき、その壮観な光景に感動し、われわれは、人はそれでもご飯を食べなければならないということを忘れてしまった。これまで何が製鉄かも知らなかった者が製鉄炉を作っているとき、創造することの狂喜によって突き動かされ、工業には科学が必要だということを忘れてしまった。この「歴史」〔一個煉鉄廠的歴史〕に書かれているのは全て真話であり、一言の誇張も書こうとはせず、嘘もつこうとは思わなかった。しかしそれは大嘘だった。一晩中眠らずに頑張ったが、実際にはご飯を作ったり湯を沸かしたりするのに使う道具と、昔からの犂を作る設備を使って、現代の工業用の鋼鉄を作ろうとしていた。その上、世界に向かってこれは偉大な壮挙であると宣言した。

何が私をここまで愚かにさせたのか。聖典同様のスローガンに対する信仰であり、これこそが祖国建設の指針だと考え、こうして私は自分の理知などとるに足りないものであり、革命の方針に従って革命的な鋼鉄を製造しなければならないと考えた。〔83-85、要約〕

この大躍進政策の失敗で、1959年から1961年までに4000万人以上の餓死者が出たともいわれている[20]。韋君宜は1961年に再びこの県に帰り、その公社と村に行ったが、「注釈」の中で、その時の状況について以下のように記している――満腔の希望を抱いて駅を出たところ、金色の大きな紅い花のような炎をあげていた10個の炉の火は消えたままで、物置になっている炉もあれば、壊された炉もあり、煉瓦は持ち去られ、至る所煉瓦の破片だらけだった。私が予言した工場群の美しい光景はまったく出現していなかった。臨時に建てた建物は工事がぞんざいで補強もしなかったため、ほとんどが人の住めるようなものではなくなっていた。養豚所に行ってみると、豚は哀れなほど痩せ、多くの柵の中が空っぽで、飼育員は自己批判を書いていた。何本もの海棠の樹が枯れ、半畝近くを占める大きな海棠の樹もすべてが枯れ枝になっていた。小傅の家にも行ったが、「現代産業工人」になってはいなかった。それでも韋君宜はまだ完全に失望したわけではなかった。無限の希望を寄せた県の「小洋群」の製鉄工場を見に行くと、13 $m^3$と25 $m^3$の小さな高炉がいくつか稼動していた。〔85〕だが、製鉄はコストが高い上に、販路もないということで、いくつもの炉が停止され、製鉄工場の閉鎖も遠くないような状況であった。もともと真面目だった県委員会も大躍進の間にホラを吹くことを覚え、三棟の小さな平屋は新しいビルに建て替えられていた。私は私の良く知っているこの県委員会に長く留まりたくはなかった、そこはもうよく知っている所ではなくなっていた。〔86〕

そして韋君宜は、「注釈」の最後の段落で、以下のように記している。

われわれの敬虔さや情熱、労働と引き換えにしたのが、このように冷酷な現実と変えようのない笑い話なのだった。そうではない！現実のせいにはできない。現実はこれまでずっと同じ姿をしている、われわれが現実からかけ離れ、信徒のような活動に従事したのが悪いのだ。普通の労働者ですらこれではだめだと知っていたのに、われわれは万にも上る人々を動かして懸命にやらせ、その上これを「工業化がはじまった」と言って、嘘をついた。感情の上からいえば心から誠実に、善意から発せられた言葉である。しかし私はこれが「素朴な階級感情」などと認めることはできない。実際われわれは宗教のような情熱の中で目を閉じ、楽園を迎えられるようにと祈り、楽園の

実現を夢に見た。みずからの壮年の歳月と新興の祖国の命運をすべて、このように、目を開いて、嘘をつきながら葬り去った。私のこの「歴史」はこのような大嘘であり、タワゴトであり、犯罪であった。〔86〕もっとも悲しむべきことは、夢を見ていたとき、それを真実だと信じていたことで、それが今ようやく分かったのだ。国家の工業化を私のような工業に無知なものにまかせ、「土法から着手」させたのは、文芸の分からない人に文芸をやらせるよりももっとデタラメだ。デタラメに人を吊るし上げることが、極めて大きな不公平を生むことについては理解していたが、デタラメに経済をやればより多くの死人と一家離散と災いを生むことを理解していなかった。愚かさの極みであり、教訓はあまりに苦い。一場の夢にこんなにも大きな代価を支払った。自分が当時この「真実を記した」報道を書いたことについて話せば話すほど、ますます恐ろしくなる。そこでこれを衆目にさらす次第である。〔87〕

この「工場史」と「注釈」を収録した『似水流年』の「後記」が、アンソロジーを除く韋君宜の全著作12冊の「前言」「後記」のうち、『回応韋君宜』に唯一収録されなかったものである。『似水流年』の「後記」では、特に「工場史」を取り上げて「真実の歴史」を反映させるために収録したと述べていた。「工場史」はもともと1959年5月に作家出版社から出版された『故郷和親人』(21)に収録されたルポルタージュで、本書の「内容説明」には、「1958年はじめ、中国文学芸術界連合会の各協会幹部は党の呼びかけに応え、河北省懐来県に下放し、労働鍛錬に参加した。本書に収めた26編の散文やルポルタージュは下放して1年の間に書きとめた生活と感想である。これらの作品は真実で素朴であり、われわれに農村における大躍進中の沸き立つ生活を見せるのみならず、党の幹部下放政策の英明さと正しさを深く理解させる」と記されている。

韋君宜は「注釈」の中で、この「工場史」は大嘘であり、タワゴトであり、犯罪であったと言うが、この「工場史」が「党の幹部下放政策の英明さと正しさを深く理解させる」といわれた時が確かにあった。『似水流年』「後記」の中で述べているように、中国革命の道程の中で、韋君宜ももちろん打撃を受けた被害者であったが、「解放後の17年間」における当初の回り道とタワゴトについては、決定権はなかったとはいえ、韋君宜にも責任がある。この「工場史」を書いて、万にも上る人々を動かして懸命にやらせたのである。どうして、タワゴトの中でむざむざと歳月を葬り去ってしまったのかを、知らせなければならない。今後、同じ回り道をしないためには、いったい何があったのか、どのような回り道をしたのかを知る必要がある。韋君宜はそう考え、『似水流年』に、「工場史」と「注釈」を収録した。「工場史」とその「注釈」の中で、「歴史」という言葉は数多く使われている

が、韋君宜にとって「歴史」とは、「工場史」の記述からも知られるように、いつ、どこで、誰が、何を、どのようにしたか、それは何故なのかの事実の積み重ねなのであった。

『故郷和親人』は今では手に入れにくい本であり、「工場史」とその「注釈」を韋君宜が『似水流年』に収録したことによって、大躍進政策における鉄鋼大増産運動の「真実の歴史」を容易に知ることができるようになったのである。

## Ⅲ　歴史を「反思」し、記述すること

本稿においてこれまでに見てきたように、『似水流年』とアンソロジーを除く、文革終結後に出版された11冊の著作「前言」「後記」の中で、韋君宜は「歴史」という言葉をほとんど使っていない。『思痛録』「前言」においても、『似水流年』「後記」のように、自分の書いた文章が「歴史」だと言うのではなく、ただ事実を述べ、事柄を1つ1つ並べるだけにする、と記していた。ところが『思痛録』が出版されると極めて大きな反響を引き起こし、韋君宜と『思痛録』を評価する多くの文章が各種新聞雑誌に発表された。多くの知識分子が韋君宜に啓発され、韋君宜とその作品、さらには歴史について語りだしたのである。それらの文章の一部は『回応韋君宜』と『韋君宜紀念集』に収録されている。

韋君宜はもはや自分の書いたものが「歴史」であるとは言わず、自分が書きたいこと、書かなければならないと思ったことを、正直に、自分が見て知っていることに基づいて書く、嘘はつかず、ホラを吹かず、捏造もしない、真話を語る、ただ事実を述べ、事柄を1つ1つ並べるだけにする、と述べているにもかかわらず、韋君宜が書いたものは、「歴史」であると言う人さえいる。

盛禹九は、「韋君宜同志は史官ではなかったが、董狐のような堂々たる筆致で歴史を書き、歴史を論じた。言いたいことをすべて話してしまう時間はなかったが、『思痛録』は世に伝えられるであろう」と述べている[(22)]。

宗蕙も、「君宜大姐〔韋君宜〕は病床の10余年間、終始ペンを手放さず、驚くべき気魄で常人の耐えがたい苦痛を克服し、ペンを執るのも難しい震える手で、直言してはばからず、自ら経てきた歴史と人生を書いた」「君宜大姐は強烈な社会的責任感と、歴史的使命感を持った作家であり、彼女の作品は文学であるばかりでなく歴史でもある。それは彼女の世代の人々が経てきた困難で曲折に満ちた現実の人生と社会の歴史的変化の過程を真に反映している」と述べている[(23)]。

しかし、歴史を記述することは容易なことではない。呉昊は以下のように述べている[(24)]——文革を体験した人は後の人々に真実の『文革史』を残す責任がある。しかしことはそ

んなに簡単ではない。ある人が「文革博物館」建設を提案したが、許可されず、大量の文革資料は散逸し、海外に流出したり、ゴミ箱に捨てられたりしてしまい、30歳以下の若者たちは文革を理解しようとしても、古い写真の中に今見ても訳のわからないシーンを見ることしかできない。歴史の真実を壊滅させることによって、歴史を改竄するのに長けた人もいる。11年前、反右派闘争30周年の時、生きている右派に依頼して、右派とされた経緯を書いてもらい、『私はどのようにして右派となったか』という本を出版しようとした人がいた。主な目的は当時のそのような歴史を忠実に記録し、後世の人々に歴史の真相を知らせんがためにである。ところがどういう訳かある種の人々の神経にさわり、彼らは「組織的な手段」を用いて本書の出版を禁止したのみならず、その背景を追求し、このことを某人の新たな罪だと言った。今にいたるも彼らは本書を出版しようとした人を大逆非道であり、「右派の巻き返し」「異端行為」だとみなしている。生きている右派は日増しに減少し、あと数年たてば、このような本を出版しようとしても不可能になってしまう。時がたてば歴史を救出するのも誰にでもできることではない。その歴史を経てきた者の責任なのである。

呉昊は、韋君宜は『思痛録』によって「歴史を救出した」とさえ述べている。これほど支持され、高く評価された『思痛録』が、前掲『中国文学編年史・当代巻』に収録されていないのは不可解なことである。中国当代文学史の中で、『思痛録』は隠しておきたいものなのか、それとも無かったものにされようとしているのだろうか。

古代史を知ることの困難は人物がすでにいないところにあるが、当代史を知ることの困難は多くの当事者や、利害のある人がまだ生存しているところにある。邵燕祥によれば、苦難をこうむった人が歴史を回顧して記録しようとしても、苦難を製造した人は、他の人が歴史を回顧することによって痛いところを突かれるために、そこで歴史を覆い隠してひた隠しに隠し、歴史を改竄して是非を混同させ、さらには贓物を処分して口を封じてしまうことまでして、記憶を扼殺し、世の人々の耳目を遮ろうとするという[(25)]。鄢烈山も、当代人の回想録はすべて読まない、今からあまりにも近いため、タブーが多く、多くの歴史の真相はまだ「大まかなのが良く、詳細なものは良くない」とされ、回想録を読んでも費やした時間に相応する新たな知識が得られない、それに人を吊るし上げたり、人から吊るし上げられたり、といった先の世代の人々の間の葛藤にも興味はない、と述べている。鄢烈山にとって韋君宜の『思痛録』は例外だったという[(26)]。

しかし、歴史を記述することの困難はそれだけではない。このような書物を読むと、疲れすぎる、生活してゆくだけでもう十分疲れているのに、これ以上疲れたくないという人もいれば、図書の出版は、前を見るべきで、歴史の古いツケをしつこく取り上げるべきで

はない、あるいは歴史を語るなら、楽しく誇りの持てることがらについて語るべきで、歴史の傷跡を暴いてはならない、という人もいる[27]。さらに、黄秋耘によれば1980年2月にはもう文革を経た人の側からさえ、「これらの悲惨な往事についてあまり語りたくない、語ればのどが痛み、聞けば耳にタコができ、読むと目も腹を立てる……」という理論が聞こえたという[28]。陳四益は、いつからかは分らないが、「文革」を語ることはタブーとなってしまったようだ、そんな指示が出された記憶もない、それどころか「文革」を徹底否定する決定すら行われたというのに、と述べている。かくして『思痛録』に描かれている事柄について、後の世代の者はよく知らず、映画やテレビの中で文革のシーンが出てきても、陳四益の子どもはおかしく思うだけで、なんの痛みも感じないという[29]。鄢烈山も「大多数の人々、特に若い人はこのような話題にもう関心を持たなくなっているのは疑いのない事実である」と述べている。

それに対して、1951年生まれの思想問題研究家で『思痛録』出版にも尽力した、雑誌編集者の丁東[30]は、彼らがこのような書籍を喜ばない権利はあるが、他の人にはそれを喜ぶ権利もある、と述べ、次のように続けている[31]——こうした書籍の作者と編集者は憲法で付与された出版の権利を有している。一部の人が喜ばないため、彼らの意見に従って、出版の方向が決定され、こうした書籍の出版が制限されるなら、その結果はゆゆしきことになる。歴史の傷跡の下の病巣がまだはっきりと診断されていないうえに、中年以上の中国人なら言わなくても分かっている歴史の教訓について、今の若者はすでに、あまりにも少ししか知識を持たない、あるいは無知ですらある。数世代の人々が、血を代価に得た悲痛な教訓はあと一世代で伝わらなくなるかもしれない。〔略〕しかし、若者の無知を責めることはできない。彼らは何によって知ることができただろう。彼らを無知のままにしておいて、先の悲劇を繰り返さないと保証できるだろうか。だから「反思」の書籍の出版は必要なのである。1998年はその発端にしか過ぎず、1999年ひいては21世紀においても引き続き「反思」しなければならない。

丁東は、この半世紀の歴史を「反思」するのは、1998年における書籍出版の一大特色〔原文は「一大亮色」〕である、と言う。「1998年十大好書」「非文学類」の第1位から第3位までの、朱正著『1957年的夏季——従百家争鳴到両家争鳴』、戴煌著『胡耀邦与平反冤假錯案』、邵燕祥著『人生敗筆』も、「文学類」第1位第2位の『思痛録』と『牛棚雑憶』も歴史を「反思」するものであった[32]。これらの書籍の出版について「文革熱」「反右熱」という人もいるが、丁東は、これは適切ではない、事実に合わないと考える。これらの本は簡単に書かれたものではなく、大部分は作者が長年にわたって心血を注いで書き上げた結晶であり、あちこちからかき集めて切り貼りした、オリジナリティーに乏しい、包装が

得意なだけの中古品と同日には論じられない。これらの書籍が1年の内に前後して出版されたのは、何とか熱を起こそうと企図されたものでは決してなく、中共第15回党大会、第9期全人代第1回会議が前後して開催されて、出版環境が提供され、出版社で棚上げにされたまま、長年に渡って許可の下りなかった好著がようやく1998年に読者にまみえる機会を得たのだ、と言う[33]。

韋君宜の『思痛録』も脱稿から実際の刊行まで約10年を要したのであった。中共第15回党大会〔1997年9月〕、第9期全人代第1回会議〔1998年3月〕が前後して開催され、出版環境が提供された、とはどういうことなのであろう。ちょうどそのころ1997年10月に江沢民が訪米し、その直後の11月に魏京生が釈放され、また1998年6月にクリントン米大統領が訪中、その直前の4月に王丹が釈放され、ともにアメリカへ出国している。魏京生、王丹ら民主活動家を釈放することによって、中国の民主化と人権状況の進歩をアピールし、米国内の対中国イメージを改善しようとする動きのなかで、これらの歴史を「反思」する書籍も出版されたとは考えられないだろうか。

だがしかし、出版環境はまた厳しくなり、1998年に中央編訳出版社から出版された戴煌著『九死一生――我的「右派」歴程』は、2006年6月、作家出版社から「改訂版」を出版しようとしたところ新聞出版総署から発禁にされたという。今も「良心に背いて歴史をごまかし、歴史を覆い隠し、歴史を粉飾し、歴史を塗り替え、歴史を歪曲し、歴史を偽造」[34]しようとする勢力は強大なのである。『思痛録』編集者の丁寧も、いつか、もしも本書を編集したために何か面倒に巻き込まれたとしても、自分は後悔しない、と書いている[35]ほど出版には困難がつきまとう。

韋君宜の最新修訂版『思痛録·露沙的路』は2003年1月に出版された。しかし、『思痛録』最新修訂版「縁起」と北京版「縁起」は同じものではなかった。最新修訂版では、471頁で引用した最後の段落の【　】内の部分のうち、最初の2箇所が削除されている。「歴史は忘却されてはならないものである」と「回想し、反思し」が削除されたのである。それともう1箇所、第2段落から香港版に無かった以下の部分が削除されている。

> 【われわれの党は成立以来、半世紀余の歴程をもつが、経験をよりよく総括するためには、歩んできた道を振り返ってみる必要がある。われわれは成功と失敗の比較の中からしか正しい思考と認識をおこなうことができない。われわれの現在の認識水準は、明らかにすでに建国以来のいかなる時期よりも優れている。長い目で見れば誤りと挫折は一時の現象であり、われわれの事業はそうすることによってさらに前途が開け、われわれの党はさらに成熟するのである。】

原文は半世紀余の「歴程」であるが、これも「歴史」とほぼ同意であり、日本語ではむしろ「歴史」と訳したほうが分かりやすいのではないか。

その一方で、最新修訂版では香港版から、たとえば以下の部分を回復させている。《　》内は、香港版でのみ印刷された部分、最新修訂版でも削除されている部分である。

> 私は若干の苦痛について記した。《しかしそれでも私はまだ、一部については〔書かずに〕我慢している。》だが、やはりこう言おう、過去の事はあまり良くはなかったけれども、良くなるであろう、と。先の指導者はそんなに良くなかったが、後の指導者はやはり良い、彼らは結局のところ祖国と人民のために力を尽くしている。少しぐらい間違えても、われわれは《耐えて》許そう。しかも許さなければならない。私はすでに自ら思弁する能力を失ってしまい、ただ党を信頼することしかできない。私はすべてが良くなるだろうと考えざるを得ない。今ではもうだんだん良くなってきている。もっとも顕著な例は10年間の文化大革命である。それは確かに良くはなく、毛沢東主席は指導を誤ったが、しかしすでに是正された。すべては良くなったではないか？今後については素晴らしい希望を抱きさえすれば、それで十分なのである。(36)

これは、香港版「縁起」「開頭」こそ韋君宜の作であることから、香港版にも無い、北京版「縁起」にしか記されていない部分を削除し、さらに香港版から文章を回復させた、といえなくもない。しかし、あまりにも「尖鋭」な472頁で引用した部分や、以下の部分は削除したままなのである。

> この歴史は誰が書いたとしても、また率直に思っていることを述べようと、婉曲に述べようと、実際にはわれわれの指導者（はっきり言えば毛沢東主席）がこれらの歳月に、人に打撃を与えた歴史、人を吊し上げた歴史について書かざるを得ない。彼が誤りを犯した歴史は、こんなにも長年にわたり、次から次へと繰り返され、人々が少し希望を抱き始めるやいなや、彼はまたやって来た。(37)

これでは本来の「縁起」「開頭」から、さらに遠ざかったといわざるを得ない。ただ「党を信頼」し、「今後については素晴らしい希望を抱きさえすれば、それで十分」なのであり、個人が歴史に向き合って「反思」し、独自に歴史を記述することは、禁忌なのであろうか。『思痛録』には、六四天安門事件について書かれた未発表の手稿〔未見〕があるが、それは香港版でも、そしていまだに削除されたままである(38)。

## お わ り に

韋君宜の著作が歴史を書いたものだといえるのかどうか。

「初めて延安の搶救運動を描いた力作」といわれる長編小説『露沙的路』について、丁磐石は、次のように述べている[(39)]。1948年秋、丁磐石は学業を投げうち北平から晋察冀解放区に行った。そこでは何度も老同志が「搶救運動」に対する不満を述べるのを聞いたが、曖昧でよく分からなかった。最近『露沙的路』を読んで、はじめてこの運動について理解することができた、という。1927年生まれの丁磐石は、1948年当時は燕京大学歴史系の学生であり、それが1994年になって『露沙的路』を読んで、はじめてこの運動について理解することができ、「この作品の搶救運動についての記述は、歴史の1つの真実の描写である」と言っているのである。搶救運動の実情についてそれまで書いた者はいなかった。『露沙的路』は小説であるが、韋君宜が「私が確かに経験した生活」を書いたという通り、小説によっても「歴史の1つの真実の描写」にまで到達することができたのである。

なぜ、韋君宜の「作品は文学であるばかりでなく歴史でもある」と言われるのか。それは、韋君宜の執筆スタイルによるところが大きい。韋君宜は、本稿において見たとおり、小説、散文を問わず、自分が書きたいこと、書かなければならないと思ったことを、正直に、自分が見て知っていることに基づいて書く、嘘はつかず、ホラを吹かず、捏造もしない、真話を語る。革命に参加するなかで、「われわれの世代が成したことのすべて、犠牲にしたもの、得たもの、失ったもののすべて」について思索・探索し、同じ誤りを繰り返さないために書いた、という。これはすなわち韋君宜にとっての「歴史」――いつ、どこで、誰が、何を、どのようにしたか、それは何故なのかの事実の積み重ねに他ならない。韋君宜の著作は、すべて韋君宜から見た中国革命史なのである。

詩人の公劉は、『思痛録』の全体的な印象について、次のように述べている[(40)]。

> 抽象的な議論もなければ、空疎な悲嘆もない、大げさな形容詞もない、全編が水気のない乾物のように乾いた文体で、自分の経験した真人真事が綴られている。とりわけ称賛すべきは、作者が自分をすっかりその中に置き、そのとき考え、やったことを、少しもごまかしたり、逃げることもなく、今その通りに書いたことである。要するに本書は確かに真話を語った書だと言える。われわれの中国においては、真話を語ることは極めて困難であり、特にそれを書いて正式に出版することはほとんど天にも昇るほど困難なことである。

また、『思痛録』編集者の丁寧も、次のように記している[41]――本書の優れた点は、非常に誠実なことである。真摯に歴史を回顧し、1つ1つの史実、事柄、人物について語り、読者に過ぎ去った年代をもう一度考え直させる。さらに視点も新しい。一般の回想録は成長史を手がかりにして、時間の順に書かれる。『思痛録』はそうではなく、革命に参加後から、一貫して運動を手がかりにして書き、成長史や身内についてはほとんど書かず、あるいは書いたとしてもそれらを一貫して次々に繰り返される運動に対する回想の中に置いて記している。

事実、韋君宜は『思痛録』のなかで、いつどうして結婚したかも、4人の子供の出産についても、子供の1人が紅衛兵に殴られて精神病になったことも、親がいつ死んだかについても書いていない[42]。ひたすら、革命に参加するなかで「われわれの世代が成したことのすべて、犠牲にしたもの、得たもの、失ったもののすべて」について思索・探索し、同じ誤りを繰り返さないために書いている。

歴史はデタラメであってはならない[43]というが、『思痛録』には記憶違いによる誤りがある[44]。

邵燕祥は、「歴史は社会的集団の記憶であり、歴史はまた幾多の世代の人々の苦難と血涙の記録でもある。『廬山の真面目を識らざるは、只身の此の山中に在るに縁る』〔蘇東坡〕のように、われわれは歴史の中に身を置いてはいるが、歴史に対して透徹した認識を持っているとは限らない」と言う[45]。

何満子は、「どの作者も当然自分の世界から大世界を観察し、読み解くことしかできない。自分の世界から読み解いた大世界は、大世界の実際とすべて合致するとは限らないが、不思議でもなければ、大したことでもない。読者が求めるのは、たとえ間違ったことを述べたとしても誠実に間違うことである」と言う[46]。

韋君宜は、もはや自分の書いた文章が「歴史」だとは言っていないにもかかわらず、宗璞は、「当然のことながら本書〔『思痛録』〕には余り正確ではない箇所もある。それぞれが歴史全体を見れば、きっと欠けた部分もあるだろう。しかし皆が自分の見ることができたことについて誠実に語ることができたなら、それこそが真実の歴史なのである」[47]「歴史というのは唖者であり、人々が知るのは書かれた文字しかない。真話が少しでも多くなればそれだけ真の歴史に近づける」[48]とまで言っている。

呉昊は以下のように述べている[49]。

> 大昔のことは言うまでもなく、近代史や現代史、現代人のことについても、明らかであろうか。必ずしもそうではない。今に至るまで、われわれにはまだ後世の人に残せ

る、修正の必要のないちゃんとした近代史、現代史と党史がない。われわれ自身が経てきた事柄でさえまだ完全には正視する勇気のないものもあり、人々にとって明白なことさえも、いまだに明確な言い方のないものもある。「当代人は当代史を編纂しない」というのなら、当代人は少しでも多くの真実の資料を残し、後世の人々が歴史を編纂するのに少しでも多くの根拠を残すことが、当代人の責任である。

この意味において、韋君宜はまさに当代人の責任を果たしたといえる。60歳を過ぎてから、人民文学出版社総編集、社長としての激務をこなしたうえで、その勤務時間外に、また闘病生活を送りながら、本稿において見てきたとおり、「われわれの世代が成したことのすべて、犠牲にしたもの、得たもの、失ったもののすべて」について思索・探索し、同じ誤りを繰り返さないために書き、12冊もの著書、呉昊のいう「真実の資料」を出版して残したのである。

**註**

(1)「著名作家韋君宜逝去」、『人民日報』2002年1月28日。
(2)「『思痛録』被評為1998十大好書之第一本」、摘自「席殊好書倶楽部『1998十大好書』綜述：1998十大好書、本年度高品位公共読物」http://mem.netor.com/m/jours/adindex.asp?boardid=9319&joursid=8192。
(3)「1998年十大好書」http://www.white-collar.net/wx_wxf/wxf01/w_99026.html。
(4) 丁寧「一筆珍貴的思想財富――『思痛録』編輯手記」、邢小群・孫珉編『回応韋君宜』（大衆文芸出版社、2001年）所収、404頁。牧惠「『思痛録』出版之後」、『回応韋君宜』所収、406頁。
(5) 邢小群・孫珉「前言」、『回応韋君宜』所収、2、3、1頁。
(6)『真話集』は、1982年10月香港で三聯書店から『随想録』第3集として出版、その後1983年2月に北京の人民文学出版社から出版。
(7) 本文中では、（　）内は引用文の原註、〔　〕内は筆者の註とする。
(8) 本文中に掲載された『牛棚雑憶』の著者、季羨林の名前は、本書「人名索引」には無い。
(9)「韋君宜在線紀念館」・「活動年譜」http://mem.netor.com/m/lifes/adindex.asp?BoardID=9319。
(10) 啓治「編集者的素質、修養、職責和作風――韋君宜訪問記」、『老編集手記』所収、82頁。韋君宜の経歴の詳細については、拙稿「韋君宜年譜」、『吉田富夫先生退休記念中国学論集』（汲古書院、2008年）所収参照。
(11) 韋君宜「我的文学道路」、『老編集手記』所収、80、81頁。韋君宜が湖北省咸寧の文化部五・七幹部学校に下放されていたのは、1969年9月から73年3月までのこと。
(12) 楊団「『思痛録』成書始末」、『思痛録』香港版所収、220、221頁。楊団「『思痛録』成書始末」は、後に『回応韋君宜』、最新修訂版『思痛録・露沙的路』にも収録された。
(13) 宗璞「痛読『思痛録』」、『回応韋君宜』所収、259頁（『文匯読書週報』1999年1月16日原載）。

(14) 原文の「半分まで印刷できていた」について、何啓治は、本書の清刷りまでできていた、という。何啓治「夕陽風采――韋君宜素描」、『韋君宜紀念集』(人民文学出版社、2003年)所収、417頁による。
(15) 拙論「中国共産党の文芸政策に関する一考察――『思痛録』をてがかりに」、『中国近代化の動態構造』(京都大学人文科学研究所、2004年)所収参照。
(16) 2007年9月8日、筆者が北京において楊団女士におこなったインタビューによる。
(17)『思痛録』香港版、6頁。
(18) 韋君宜「対夢囈的注解」、『似水流年』所収、82頁。
(19)『思痛録』北京版51、63、187頁。王培元『在朝内166号与魂霊相遇』(人民文学出版社、2007年1月)、「韋君宜:折翅的歌唱」127頁。
『故郷和親人』(作家出版社、1959年5月)「前言」によれば、中国文学芸術界連合会の各協会幹部120余人がこのとき、幹部は下放し、労働鍛錬をせよとの党の呼びかけに応えて河北省懐来県に来たという。
(20) 天児慧他編『岩波現代中国事典』(岩波書店、1999年)1344頁、韓鋼『中国共産党史の論争点』(辻康吾編訳、岩波書店、2008年)51頁など。
(21)『故郷和親人』「前言」によれば、河北省懐来県に下放された幹部にとって、懐来県の農村は故郷で、本書の中に描かれた農村幹部と社員は身内であり、永遠に彼らを懐かしく思う、そこで『故郷和親人』を書名とした、という。
(22) 盛禹九「一個大写的人――懐念韋君宜」、『韋君宜紀念集』所収、163頁。
(23) 宗蕙「為君宜大姐送行」、『韋君宜紀念集』所収、238頁。
(24) 呉昊「搶救歴史」、『回応韋君宜』所収、325、327、324頁(『随筆』1999年第1期原載)。
(25) 邵燕祥「一切良知未泯的人、応該同她一起思考」、『回応韋君宜』所収、250頁。
(26) 鄢烈山「一本“老豆腐賬”?――韋君宜『思痛録』読後」、『回応韋君宜』所収、331頁(『雑文界』1998年第4期原載)。
(27) 丁東「反思歴史不宜遅」、『回応韋君宜』所収、365頁(『出版広角』1998年第6期原載)。
(28) 黄秋耘「一個不可不読的書」、『韋君宜紀念集』所収、538頁(『羊城晩報』1998年7月15日原載)。
(29) 陳四益「不該忘却的歴史――読『思痛録』」、『回応韋君宜』所収、279頁(『大公報』原載)。
(30) 丁東については、「丁東簡歴」http://www.dajun.com.cn/dingdong.htm、「公共知識分子50人:丁東」http://business.sohu.com/20040908/n221944979.shtml、章詒和『嵐を生きた中国知識人――「右派」章伯鈞をめぐる人びと』(横澤泰夫訳、集公舎、2007年)の「訳者あとがき」409頁による。
(31) 丁東、前掲文、365、366頁。
(32)「1998年十大好書」http://www.white-collar.net/wx_wxf/wxf01/w_99026.html。ちなみに「非文学類」第4位は、何清漣著『現代化的陥穽――当代中国的経済社会問題』、「文学類」第3位は、余華著『活着』であった。
(33) 丁東、前掲文、363、365頁。
(34) 元中国国営新華通訊社(新華社)高級記者・戴煌「司法の不法を告発する〜言論と出版の自由のために〜」(横澤泰夫訳)http://www.21ccs.jp/china_watching/ChinaPublish_YOKOSAWA/China_Publish_04.html。
(35) 丁寧、前掲文、404頁。

(36)『思痛録』香港版「開頭」7頁、最新修訂版5、6頁。
(37)『思痛録』香港版「縁起」1頁。
(38) 楊団女士への前掲インタビューによる。
(39) 丁磐石「一本真実的書」、『韋君宜紀念集』所収、557、559頁(『深圳特区報』1994年11月26日原載)。「丁磐石書画作品選」http://scholar.ilib.cn/A-xwyxz200703049. html。
(40) 公劉「触人痛思的『思痛録』」、『回応韋君宜』所収、272頁(『同舟共進』1998年第9期原載)。公劉(1927-2003)もまた、同274頁で、「より多くの老同志が、韋君宜のようにみずからの回想録で真相を語り、後の人が歴史を認識し、歴史を銘記するのを助けるよう望む」と記している。
(41) 丁寧、前掲文、401、402頁。
(42) ただし韋君宜は、最初の娘が搶救運動のさなか夭折したことについて、『思痛録』第1章に記している。
(43) 呉昊、前掲文、325頁。
(44) 前掲拙論「中国共産党の文芸政策に関する一考察――『思痛録』をてがかりに」374頁と註(14)参照。
(45) 邵燕祥、前掲文、254頁。
(46) 何満子「以良知呼喚同時代人的良知――読韋君宜『思痛録』」、『回応韋君宜』所収、245頁(『深圳特区報』1998年6月28日原載)。
(47) 宗璞「痛読『思痛録』」、『回応韋君宜』所収、260頁。
(48) 宗璞「大哉、韋君宜」、『韋君宜紀念集』所収、220頁。
(49) 呉昊、前掲文、324頁。

本稿は、日本学術振興会平成19・20年度科学研究費補助金(基盤研究(C)「韋君宜から見た中国革命史再構築の試み――作家、編集者、革命家の視点から(課題番号:19520317)」)の交付を受けて行なった研究成果の一部である。